



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

「時代の変革者 渋沢栄一の半生」

第5回：欧州・静岡編

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)

19 いざ、フランスへ

そもそも、フランス行きの経緯は次の通りである。幕府と友好的な関係にあったフランスはパリ万博開催に際してフランス公使から幕府へ、「日本からは大君（将軍）の親戚を派遣するのが良いのではないか」という話を受けて、評議の結果、水戸の民部公子（将軍慶喜の弟、昭武、当時14歳）を派遣することとなったのである。外国奉行ら幕府の役人も同行するが、博覧会が終了後には、昭武をフランスで留学させることになった。期間は未定だったが、5年から最長で7年ともという話も出ていた。水戸藩からはお付として7人が同行するが、彼らは相も変わらず外国人のことを“夷テキ禽獣”とのみ思っている輩たちだったので、将軍慶喜はこんな頑固な連中が家来では、昭武に学問をさせるというのはかなり困難であるし、彼らは会計事務（経費管理）を扱う能力もないことから、栄一に白羽の矢が立ったのである。

将軍慶喜は、この務めは栄一こそが適任であり、また将来に期待する人物でもあるという点も考え彼を指名したという話であった。

栄一にとっては、まさに晴天の霹靂のような話だったが、庶務会計を担当する「御勘定役、陸軍附調役」として派遣が決まった。一橋公が将軍職を継ぎ、前途に絶望し、切腹まで考えていた彼にとって、話を聞いた時の嬉しさは、他に比べられないものだった。かつては攘夷論者であったわけだが、「速やかにお受けいたしますから、ぜひお遣わしてください。どのような苦勞も決して厭いません」と即答した。

出発は年内、1か月以内であることを聞いて栄一は驚いた。様子もわからず、栄一は自らの思いのまま支度を整えざるを得なかったのである。栄一は黒羽二重の小袖と羽織り、どんすの義経袴などを行李に入れた。古い靴、ボーイが着る燕尾服の上着と縞ズボン友人からもらった。相談できる人はいないし、そもそも洋服は何を着たら良いのかさえも知らなかった。

妻千代、盟友喜作ら親族との別れ

一人で決めてしまったフランス行きだったが、栄一は盟友・喜作の意見も聞きたかったし、出発前にじっくり話したかった。栄一は江戸に行っていた喜作がいつ戻ってくるのか、じりじりと待つ



使節団全体写真 後列左端が渋沢栄一（渋沢史料館所蔵）

ていたのである。間に合って戻って来た喜作とこれからの二人の将来について語り合った。

徳川幕府のもう長いことはないこと、主君を無くすことも覚悟をしておかなければならない。また海外と国内に分かれることになったが、お互い死に恥だけは残さないよう等を語り、誓い合っ

て二人は別れたのである。

この先、何年フランスに滞在するかも正確には分からない状況で、無事に帰国できるかもわからない。そこで栄一は、もし彼に万が一のことがあっても、家名を断絶させない策として妻千代の弟、尾高平九郎を見立て養子に迎えた。平九郎は役にはつかなかったが、幕府から禄を食むこととなった。妻の千代には、ようやく出発2日前に民部大輔様（徳川昭武）に付添ってフランスへ行くこと、3年程度滞在する予定であることを書き、金5両を添えて手紙を送ることができた。夫婦とは名ばかりで、栄一が国をとびだして4年、千代とは3年前に一度、深谷宿で会話を交わしただけだった。

慶応3（1867）年 正月11日に出発した。フランス郵船アルヘー号に乗り、横浜を出発。上海、香港、サイゴン（現ホーチミン）、シンガポール、スリランカ、アデンを経てスエズに到着した。ス

エズから陸路を経て、アレキサンドリアへ向かった。（この時、スエズ運河は開削中で利用できなかった。）総勢20人を超える大使節団となった。

20 航海は驚きの連続

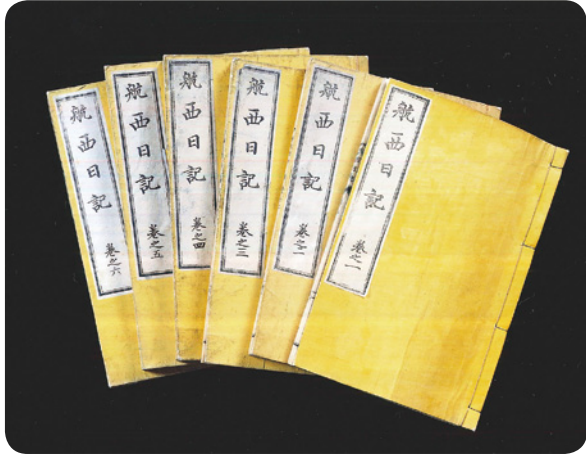
多忙にもかかわらず、栄一は日記をつけている。この日記が「航西日記」として、現在まで残っている。中には船上での食事の内容や栄一のコメントが細かく書いてある。

さて、以下に紹介するのが、「航西日記」の中で、現代でいう“食レポ”を行った箇所である。著名な日本史の研究者であるドナルド・キーンは、このことについて、「渋沢栄一以前、日記作者で自分が食べた食事の内容を記した人物はいない。」と書いている。とすると日本史における“食レポ”の先駆けは渋沢栄一だったのかも知れない。

栄一についての多くの関連書籍でほぼ必ず引用、掲載される言わば“鉄板ネタ”である。やや長い

が本誌も掲載する。

以下、「航西日記」より（現代語訳）



航西日記（渋沢史料館所蔵）

日本初の“食レポ”は渋沢栄一

～おおよそ毎朝7時頃には、旅客が洗面を済ませた頃、テーブルで茶を飲ませる。茶の中には必ず砂糖を入れ、パン菓子を出す。また豚の塩漬けなどを出す。プール（バターのフランス語）という牛の乳を固めたものをパンに塗って食べる。味はとても美味しい。同じく10時頃になると朝食を食べる。

食器はすべて陶器の皿に銀のスプーン、並びに銀のフォーク、ナイフを添える。果実、みかん、ブドウ、梨、ビワほか数種を卓上に並べ、好きなときに切って食べる。また葡萄酒へ水を足して飲む。魚、鳥、豚、牛、牝羊の肉を煮るか焼かして食べる。パンは一食に二片か三片を好きなように食べる。

食後はカッフェー（コーヒーのフランス語）という豆を煎じた湯を出す。砂糖、牛乳を加えてこれを飲む。胸がスツとする。午後1時頃に、また茶を飲む。果実類、塩肉、漬物を出す。朝飯とほとんど同じで、ブイヨンという獣肉、鶏肉などの煮汁を飲ませる。パンはない。

熱帯地方に入ると、氷を水に入れて飲む。夕方の5時、または6時くらいには夕飯が出る。朝飯と比べると、とても丁寧である。まずスープから始まって、肉を煮るか焼いた物、各種の料理と山海の果実、およびカステラ的一种。あるいは砂糖から作ったアイスク

リームを食べる。夜8時から9時頃、また茶を出す。朝から夜まで食事は2回、茶は3回だった。～

航海中の栄一は、暇な時間はフランス語の勉強をした。彼はこれまで、攘夷論を主張して、外国人は全て野蛮で獣のようであるという考えで軽蔑していた。しかしながら、いよいよ外国へ行くことと決めた以上は、この際早く外国語を覚えて、外国の書物を読めるようになりたいと思い、船には弱い彼であったが、ひたすらフランス語の勉強に充てたと書いている。

21 スエズ運河の事業に驚愕

一行は2月21日にスエズに上陸して、カイロを経て、アレキサンドリアで地中海船に乗り換えるまで、陸路を汽車で地中海へ出るという旅行となった。当時、スエズ運河は運河の開削工事中だった。栄一は「汽車の窓から見ると多数のテントが並び、人夫などが土畚を運んでいた。1865年に起工して、45年後に完成することを聞いて、その工事が大規模であることよりも、むしろ一身一為のためのみならず、国家を超越して進んでいくように、世界人類の利益のために、このような大規模な工事をしていることに感服した。」と、地中海と紅海を結び、ヨーロッパとアジアを最短距離で連結するという、国家を超えた思想に初めて遭遇し、肝をつぶしたこと、それ以上に事業が個人の利益のためでも一国のためでもなく、国家を超越した世界の利益を守るために始められた事業であることに大いに感心している。

栄一、“窓ガラス”なるものを知る

さて上記のアレキサンドリアまでの初めての鉄道旅行に関して、面白いエピソードが残っている。



栄一の散切り頭（渋沢史料館所蔵）

栄一はパリから血洗島村の家に手紙や写真を送っている。まだ写真そのものが珍しい時代、留守家族にとって丁髷を切って洋服を来た栄一の写真には驚いたに違いない。妻の千代は、変わり果てた夫の姿をあさましく思い、他人に見せないように隠してしまったという。

栄一も含めて同行する者たちは、誰一人として「窓ガラス」というものを知らなかったのである。汽車に乗ってから窓外をみると、全く透き通って見えるので、外へ捨てるつもりで、食べていたミカンの皮を何度も投げた。すると隣にいた西洋人が怒って何か言いだした。お互いに言葉が通じないから、言い合っているうちに暴力沙汰になってしまった。そこで栄一たちは、言葉がわからないながらも、よくよく話し合ってみると、結局のところ日本人が「窓ガラス」を知らなかったことが原因で起こったことだと判明した。双方とも笑って話が終わったとしている。

さて、一行はアレキサンドリアから再び海路を利用して、横浜を出発して59日目、2月29日にフランスのマルセイユに到着した。マルセイユから鉄道を利用して、3月7日にパリに到着した。

22 いよいよ花の都パリに

栄一の仕事は、昭武の一切の身の回りの世話、日本への連絡担当、一行の給料の支給、日用品や備品購入など多岐にわたった。パリ万博は、4月1日に開幕となるが、3月末から公式日程が始まった。3月24日に昭武が皇帝ナポレオン三世に拝謁する（栄一は同行せず）。当初は儀式が多く、こ

れは外国奉行の管轄だったこともあり、栄一は比較的暇であった。パリ市内の様々なところを訪れた。中でも水族館、軽気球、競馬、動植物園、大砲機械貯所、パリ市の下水道、病院、飲用水設備、観兵式などに興味があったと、日記に書いている。また、しばしば演劇や宮廷などの舞踏会、博覧会などにも参加している。

フランスへの航海中に続き、栄一が力を入れたのがフランス語の勉強である。一日でも早くマスターしようと思い、教師を雇って勉強を開始する。当初、宿泊していたグランドホテルを出て、アパートを借りて、毎日教師を呼んでフランス語の勉強を続けた。ひと月ほどで、買物など日常生活には不自由しないようなレベルまでマスターした。

万博関連の公式日程もひと段落すると、栄一は昭武の諸国公式訪問へ随行した。主な訪問国は以下の通りとなる。

8月初旬～9月中旬

スイス、オランダ、ベルギーを歴訪

9月下旬～10月下旬

イタリアへ

11月上旬～下旬

イギリスへ巡回してパリに戻る

23 人生に影響を与えた3つの体験

産業革命や都市大改造後の万博の舞台となったパリ、また欧州各地への訪問で、栄一はガス燈や上下水道などの社会インフラをはじめ、織物工場や機械工場なども視察した。また鉄道や海運の発達も目の当たりにした。まさに聞くこと、見ること全て驚きの連続であった。その中でも、その後の栄一の人生に非常に大きな影響を与えた3つの体験を紹介したいと思う。

役人と対等に話す商人たちに驚く

まず栄一が驚いたのは、人と人との身分の差別がなかったこと、日本では当然だった官尊民卑というものがないことだった（“侍と商人”が対等の立場で話している姿に栄一は強い衝撃を受けたのである。）。

パーティーにてナポレオン三世が昭武のお守り役として任命したヴィレット大佐とパリにおける幕府の代理人である銀行家のフリュリ・エラルが会話をしている姿に驚愕、感銘したとしている。栄一の常識からすれば、「武士」である軍人と「商人」である銀行家とは、支配と服従の関係であり、対等の交際が出来るわけがないものであった。また二人の姿を見るに、軍人の方が、むしろ遠慮し、商人を尊敬するように話しているごとく見受けられたのも驚いた。

商工業者の地位や官吏、軍人との関係が日本とは全く違う。全ての人々が平等である。そこで栄一は将来、政治家の道を断念し、商業（実業）を振興して、官尊民卑の旧習を打破しようと考えたのである。人と人との身分の差別を無くすこと、それを実現させるためには“民業の振興”にあると

決意を新たにしたのであった。

自国製品を売り込むベルギー国王に驚く

次に栄一が驚いたのが、ベルギー国王レオポルド二世の言葉であった。同国王主催の晩さん会にて、昭武が製鉄工場を見学して、大きさに感動したことを伝えると、国王は栄一たちに、「これからの世界は鉄の世界である。製鉄事業の盛んな国は必ず栄える。～略～ 日本が将来、鉄を盛んに用いるようになったら、生産が豊富であり、品質も良好である我が国の物をぜひ用いるようにせられたい。」と話したのである。

この自国の鉄鋼を売り込むベルギー国王の言葉に、栄一は度肝を抜かしたのだ。「“官のなかの官である”国王ともあろうものが、自国の鉄を売り込むとは」……驚くと同時に感嘆した。日本では身分のある人は金銭や商売の話をお口にしないのが、品位を保つものと考えられているのだが、ヨーロッパでは、国王ともあろう人が、三段論法で商売人のように鉄を売り込んでいるのだ。またその時の態度が偉ぶらず非常に“平民的”だったことに、彼は、国王がこのような態度であることは、一般の人々も商業や産業に冷淡であるはずがないとも感じたのである。

合本組織は社会変革をもたらすと確信を得る

ヨーロッパ滞在中において栄一が最も興味を持ち、刺激を受けたものが「合本組織」※というものであった。栄一は、青淵回顧録等の中で、以下のように当時の思いを語っている。

～パリの多くの会は、一般大衆から資金を集めて、大規模な事業を営んでいる。一人一人が投資する金額は少額でも、数が集まれば巨額になる。そこで経営者の賢明な運営が産業を興しながら利

益を上げていく、大衆の出した金の子供を産んで大衆に帰り、引いては国を富ますことにつながるというこの合本組織は、単に多くの資本結合を核とする経済組織ではなく、社会変革をもたらす組織である。

事業が合本組織で非常に発展し、官民の関係が大変親密であること。合本組織で商工業が発展すれば自然と商工業者の地位が上がって官民の間が接近してくるだろう。一人だけ富んでいては、それでは国は富まない。国家は強くならない。殊に今の商工業者の位置は卑しい。力が弱いということを救いたいと考えるならば、全体として富むことを考えるよりほかない。全体に富むという考えは、これより合本組織を日本に定着させるしかない。～

栄一はその後、この言葉通り、合本組織を日本に定着させるために生涯をかける。また合本組織の充実のためには、バンク（銀行）の充実が必要であるとした。栄一はヨーロッパ滞在中に学んだ紙幣の流通、バンクの存在と機能、株式取引所や証券や公債の在り方などを合本組織とともに実現させていった。これは彼が日本近代経済の父と呼ばれる所以でもある。

ここに書いた3つことは、栄一が、それまでの家業の藍玉づくりの経験などから培ったビジネスの感覚があったらこそ、その実務体験から興味が沸き、容易に理解できたものと考えられる。

※「合本組織」についての詳細な説明は16頁を参照ください。

24 産業、社会インフラも体験

さて3つのこと以外にも栄一は当然のごとく様々なモノを見て、体験してきている。それらを紹介したいと思う。



ヨーロッパ滞在中の栄一
 (渋沢史料館所蔵)

鉄道体験から、陸運や海運に関心を持つ

マルセイユからパリへ汽車で行ったのだが、栄一はこの便利さに大変感心している。「国家はこのような交通機関を持たないと発展はしない」、「日本にも鉄道を敷設しなければならない」「定刻になるとカネを鳴らして人を集めてから発車する仕組みは、すばらしいシステムである」と考えた。

栄一は交通機関である海の船舶、陸の鉄道は是非に必要であるから、日本に帰ってからは是非取り組みたいと思うようになった。

新聞の便利さを知る

世界のファッションの中心であったパリ、当時流行した女性ファッションやナポレオン三世の演説内容が翌日の新聞で知ることができた。これに栄一は非常に驚いた。世間の出来事から国家の重要問題まで幅広く取り上げ、これを世間一般に広く知らしめるもので、非常に重要であると感じた。

病院の見学、社会事業との関りの原点

栄一のその後の社会事業の関与への原点となる経験となったのが、昭武と訪れたパリ市内の病院見学であると言われている。数階建ての建物で、入口に守衛をおいて、各病室が病人の種類によって上等・下等に分けられていると航西日記に書いている。病室では番号のあるベッドがあり、寝具はすべて白く清潔を保っている。薬局や食堂もあり、シャワーや浴室、そして冬用の蒸気パイプの暖房もある。「フランスでは、病人は全て病院で療養でき、その天寿を全うできるという。これこそ人命を重んじる道である。」と感慨を綴っている。

25 留学に向け本格始動へ、しかし…

幕府側の使節として同行していた外国奉行関係者が各国訪問終了に際して帰国したこともあって、栄一は、最初の目的通りに“学問一途”ということで留学準備に入った。語学教師を雇い入れて勉強を始めることになった。

昭武は、毎朝7時から9時まで乗馬の練習、朝食後に教師が来て、午後3時まで語学を勉強した。その後と言えば、予習や作文などをするため忙しいが充実した毎日を送るようになった。

しかしながら、その平穩も長くは続かなかつた。1867（慶應3）年末、日本で大変革が起きていることがパリの新聞でも報道されるようになった。翌年1月、幕府からの知らせによって、大政奉還がなされ薩長と幕府が対峙していることが分かってきた。幕府瓦解が明らかになって、留学継続が大きな問題となってきた。時期を同じくして、朝廷より3月21日までの帰国命令が届く。

しかしながら栄一にとって、このことは予期した

ことであったため、外国奉行と相談して昭武はフランス留学を継続し、幕府留学生を帰国させるということに決めて、資金調達の方法を探っていく。栄一は経費削減に取り組んだ。これまで以上に昭武の随行人員を減らし昭武、栄一の他3人の合計で5人で、手軽な借家に移った。幕府からの毎月5千ドルの仕送りが5月まで続いていた。幕府等からの留学生らの日本への旅費を支払ったとしても、昭武だけであれば、何とか2年程度は留学を継続できるものであった。努めて節約を進めてきていたので、2万両にもなる余剰金も生まれていたのである。2月にその資金でフランス公債を半分買い、さらに残りで鉄道会社の株も買って、留学継続の準備も怠りなかった。鉄道会社の株が上がっていたため、500～600円の売却益を得る。ここで公債の便利さを知るのであった。

もし極端に節約すれば、4～5年は続けられる見通しも栄一にはあった。しかしながら栄一は念には念を入れようと考へ、経費を準備するため遠く血洗島村の父に資金支援の手紙を送っている。父は、徳川家の恩顧を受けた以上、徳川家のために尽くすのは当然として、田畑など家産を売却してでもできるだけ多くの資金を作り、送ってやるとの返事をしている。

こうして、留学継続の手立てができたところで、新たな不幸な知らせが届く。水戸侯（慶篤）が逝去、昭武が水戸家を相続することになったのである。昭武にとって留学継続は万事休す。帰国しか選択肢が無くなってしまった。9月4日のマルセイユ出発となってしまった。

26 悲運の帰国、罪人扱いに

明治元（1868）年11月3日に横浜に着いた。出国の時には全てが変わっていた。横浜に着くと、

取締りの役人からいろいろと尋問を受けて、非常に不愉快な思いをさせられた。その時の光景を栄一は「幕臣は野良犬のような扱い」と言っている。

帰国後、親戚筋であり、かつての同志であった人たちが討ち死にしたなどの話を聞くと、栄一は世の中とは本当にはかないものであると嘆くしかほかはなかった。特に、自分が洋行中に万一の事があつたらと、見立て養子の平九郎が彰義隊と袂を分かった振武軍に参加し、飯能戦争で命を落としたことは、大きな衝撃であった。

事前に父へは帰国の予定を知らせていたので、東京に来てくれていた。父は無事に帰国した栄一を見て、当然ながら喜んだ。父に今後、どのように生きていくのかを聞かれた栄一は、「函館（五稜郭）に行く気もない。新政府に仕官するつもりもない。駿河へ移住して、慶喜公の傍らで生涯を送ろうと思います。別に何か生計の道を立てて、旧主君の先行きを見守ろうと思います。」と応えた。

そこで父は、「この後も、身の上が定まるまで衣食にも事欠く場合もあるだろうから、わずかながら金銭を持参した。」と援助を伝えるが、栄一は丁重に断っている。父が血洗島村へ戻っていった後、栄一も故郷戻り、久々に父母妻子と面会、近所の人にも会い2～3日逗留して、東京へ戻ってきた。

27 慶喜公の御傍で終生、穏やかに

水戸家を相続することになった昭武は栄一を殊の外頼りにしていた。2年も一緒に暮らしていたのだから当然と言えば当然である。帰航の途中に、「日本に帰ってきたからには、水戸に来て欲しい。」と気持ちを伝えられていた。しかし、その気持ちを胸にしまったまま栄一の足は駿府（現静岡市）へ向かっていた。

慶喜公は宝台院という小さな寺に謹慎中だった。栄一は、駿府に着いた翌々日に慶喜公に拝謁し、その変わり果てた前將軍の姿を見て落涙した。しかしながら、努めて気丈に振舞い、栄一に接してくれた慶喜公に気を取り直して、帰朝の報告を行った。栄一が、「世を捨てて、慶喜公の傍らにいたいと考えたのであり、農商業に従事して、平穩に余生を送ることとした。」という意向を慶喜に伝えるのであった。

勘定組頭の辞令に激怒、これを蹴る

4日後、藩庁から突然の呼び出しを受けた。出向いてみると、「駿府藩勘定組頭」の辞令を渡されたのである。これに驚いた栄一は、「自分はわずか70万石となった困窮している駿府藩の禄を食うために来たのではない。」と中老らを罵倒し、この誘いを断った。翌日、中老大久保から再度の呼び出しがあり、慶喜公の思いを伝えられたのである。「すでに水戸藩の昭武から栄一を水戸藩へという希望が慶喜公のもとへきている。しかしもし栄一を水戸にやると、藩内で栄一に害を及ぼす者もいるかもしれない」との慶喜公の思い、彼の静岡に栄一を留め置くための策略だったのであった。しかしながら、別に考えがあることを伝え、職を辞退した。農業に従事して平穩に暮らすことで、余生を送ろうと考えた。

その時の栄一の考えが残っている。以下の通りである。「このさい静岡へ移住することを覚悟したのは、まったく世を捨てて一橋前公の傍らで静かに生活したいと思ったからである。ところが今の職務を受けてしまうと、すなわち藩から俸禄を受けて仕える者となる。すでに世は天皇親政がはじまったから、この藩という体制もまた、永久に変わらないなどと決めてかかることはできないだろ

う。それなのにいまこの藩庁で職を得て、その務めに苦勞しても、その成果は極めて薄弱なことである。たとえこの藩に用いられて重要な人物になったとしても、はじめの志にかなったとも言い難い。ならばむしろ農業や商業に従事して、平穩に残りの人生を送る方が安全である。」

28 初の合本組織、静岡から産業の変革を

栄一が日本に戻って来た時と同じ頃、新政府から諸藩へ「石高拝借」という施策が行われた。明治維新をしたはいいが、新政府にはお金がなくて財政が著しく逼迫したところから、およそ5,000万両あまりの紙幣（太政官札）を刷って軍事そのほかの費用を支えていた。しかしその紙幣は民間であまり流通していない。そこで、新政府はその流通を全国に広げるため、諸藩の石高に応じて新紙幣を貸し付け、年3パーセントの利子で、13年の年賦として償却するという方法だった。「石高拝借」は、新紙幣の流通を円滑にしようという意図で設けられたもので、政府の財政政策であった。この時、70万石あった静岡藩には、70万両が割り当てられたのである。

“建白魔”と言われた栄一の面目躍如で、1868（明治元）年年末に詳細な計画書を藩庁へ提出した。この太政官札を利用して、地元商人からの出資を募って合本組織による商社を設立し、得た利益で年々返済に当てていくことを提言した。提言内容は、協議を重ねるまでもなく承認された。

そこで栄一は、「石高拝借」の総額を、藩の支出などに当てずに、全て別会計として、殖産興業を進めて、その利益金を政府への返納金とするようにしたならば、藩庁の利益、人民の幸福に結び付く。西洋で行われている方式を採用することとした。株主の募集に当たっては、参加を希望する人は、侍、町人、百姓であろうと身分による差別を設けない、出資額の大小によって差別を受けることがないなど栄一が欧州で学んだことを実践した。静岡の商法会所は、我が国最初の合本組織（現在の株式会社と理解されている）として注目される。日本の商業に新たな命を注ぎこむ一助になる。地方の商況を一変させ、大いに進歩させるだろう。静岡藩を端緒に全国へ発展させよう等、栄一の商法会所に賭ける意気込みは並々ならぬものがあつた。

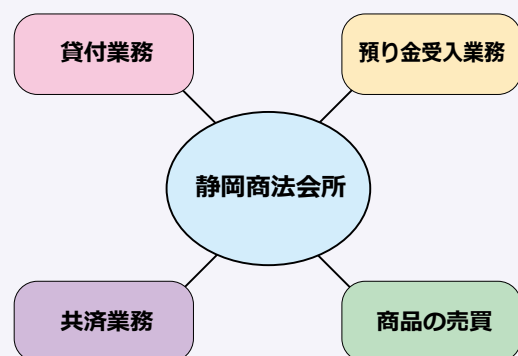
藩庁は、市中紺屋町にあつた旧代官所を店舗に銀行と商社を混合したような組織、「商法会所」

■商法会所の業務とは

欧州滞在中に栄一が見聞した事業の運営方法である。多くの人からの集めた資本を合同させて、一つの商会を結成してモノの売買や金銭の貸借を取り扱わせれば地方の産業構造を一変させて、大きな成果があると考えた。「合本組織」又は「合本主義」とも言われる。

一般的には現在の株式会社の原型とされ、栄一が静岡で始めた商法会所を初めての株式会社とすることが多い。

しかしながら栄一が唱えた合本組織は、公益を追求するという目的意識を持って、株式会社よりも強い規範を伴っていると考えられる。



として設立し、商法会所の運営責任者として栄一は頭取に任命された。陣容は藩士 12 名、町人からは御用達肝煎りが 4 人、御用達が 30 人、他に 40 人で構成された。主な業務は、商品抵当の貸付金、定期当座預金、製茶や養蚕等を発達させるための貸付金、京阪地域での米穀や肥料等を買入れ、駿府やその他の地方に売却等を業務とした。

妻子を呼び寄せ、束の間の団らん

私生活では、3月に妻子を呼び寄せて、一家を構えた。ようやく家族水入らずの安定した生活を送れるようになったのである。

5月には商法会所として藩の資本で商業をやるには、朝廷の意向に忤るから、名称を変えよと藩

庁から内意があったので、「常平倉」という旧式な名前に改めたが実態は変わらなかった。大阪と清水港、浜松と東京間になどに商業販路を開拓して、当初8か月で、8万両の利益を上げた。

常平倉の基礎が固まり、さらに大きく業容を広げていこうという矢先、1869（明治2）年10月に栄一は突然に太政官から呼び出しを受けるのだった。最も当惑したのは、栄一自身であった。栄一は、新政府が嫌いであったし、駿府での仕事もあるので、東京へ行くことを渋っていた。しかしながら、栄一を出頭させることを渋って、新政府に睨まれたら困るとの藩庁の意向もあって、やむを得ず、東京へ行くこととした。そこに待っていたのは、民部・大蔵省（現在の財務省）の大隈重信だった。

ぶぎん地域経済研究所

文化講演会

時代の変革者 渋沢栄一

第一部：大河ドラマを10倍楽しむための基礎講座

～エピソードが語る波瀾万丈の半生～

第二部：「論語と算盤」彼が本当に伝えたかった事

▶実は豪農のボンボンだった!? ▶17歳、官尊民卑の打破への発火点▶運命のいたずらで幕臣に、切腹を考える▶欧州で目覚める「合本主義」▶「バンク」は金行？金舗？それとも銀行か？▶“財政を知らない” 大久保利通と正面衝突！▶三菱、岩崎弥太郎との”15年戦争”の結末▶生涯をかけた社会福祉と慈善活動▶手が届かなかった「ノーベル平和賞」他

日時

2021年

1月21日(木)

14:00～

16:00

講師

松本 博之

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹

参加費：ぶぎん経営者クラブ会員 無料 会員外 5,500円（税込）

開催方式：WEB開催（Zoom 配信）

メールアドレスをお届けいただいている会員さまは、弊社HPからもお申し込みいただけます。

<https://www.bugin-eri.co.jp/>

お申込み・お問合せ先

ぶぎん地域経済研究所
経営情報事業部（担当：澤田・佐藤）



048-647-8484



sawada@bugin-eri.co.jp